Special Interview

巻頭インタビュー！

生ける伝説の映画監督
村川 透

1972 年に日活ロマンポルノ映画「白い指の戯れ」で監督デビュー以降、「大都会」「探偵物語」「西部警察」「あぶない刑事」等のテレビドラマ、「最も危険な遊戯」「殺人遊戯」「蘇える金狼」「処刑遊戯」「野獣死すべし」「もっともあぶない刑事」等の劇場映画作品をはじめ、数多くの作品でメガホンを取って来た村川透さん。

85 歳を迎えた現在も大好きな映画を撮り続け、音楽も愛する生ける伝説の映画監督とのスペシャル・インタビューが実現！　映画との出会いから音楽については勿論、松田優作さんとのエピソード等々、たくさんの貴重な話を聞かせて頂き、そのお人柄にも感銘を受けました。

【2022 年 11 月 23 日　取材・文：加瀬正之
取材協力：荘司正敏】

写真提供：村川透さんより

♪ 現在の活動について聞かせ下さい。

この歳になっても映画を作っています。これまで「あぶない刑事」の編集等をやっていましたが、コロナの状況もありまして、今はシリーズの半分くらいを私が手掛けて来ました「西村京太郎サスペンス 十津川警部シリーズ」の編集やダビング作業をしています。あと、2014 年 6 月に山形の実家の跡地に「アクトザール M.」という小さなホールを作りまして、その運営もしています。

♪ お兄さんは有名なオーケストラ指揮者の村川千秋さんで、村川さんご自身もジャンルを問わず音楽への造詣が深く、ご自身でサックスも吹かれていらっしゃいましたが、村川さんと音楽との出会いについて聞かせて下さい。

生まれましたのが戦前の昭和 12 年で、4 歳上の兄貴がいて末っ子でしたが、両親が音楽好きでいろいろな楽器もやっていました。父親が尺八を吹いたり、母親が琴を弾いていましたので、2 人の合奏を聴かされたり、兄弟揃ってクラシックを聴いたりしていました。父が蓄音機を持っていて、歌舞伎、小唄や端唄、クラシックはもちろん、あらゆるジャンルの音楽のレコードも持っていましたので、家では常にレコードを聴かされていましたね。正月からほとんど毎日音楽漬けの環境でしたので、うちの兄貴も感化されて、音楽があると気が休まるという生活でした。私はリード楽器が好きで、サックスが魅力的だったので、サックスでダンス音楽などを演奏していました。兄貴もクラリネットで東京芸術大学を受けましたので、大学時代のアルバイトでダンスホール巡りをして、兄貴にも聞きながら独学で演奏していました。

でも、プロになりたいとは思わず、私は映画を作りたくて、4 歳の頃から父が買って来てくれた映写機で撮影して、レコードの音楽を鳴らしたりしていましたね。昔は無声映画でしたからね。子供の頃から、“ 将来は絶対映画監督になるんだ！ ”という強い思いがありました。音楽に関しては聴くことは大好きでしたし、戦後 FEN（1945 年から在日米軍向けに放送されていた極東放送網で Far East Network の略。1997 年に AFN に統合）のラジオから流れる音楽を聴いて育ちましたので、映画音楽に関しては、“ 監督になったらこんな音楽を使おう！ ”と心に留めて勉強を兼ねて聴いていました。

♪ 映画監督になる夢を実現された形なのですね！

家に蓄音機、レコード、楽器など音楽に関するものがいろいろあった中で、私は 4 歳の頃から幻灯機（映写機の原型）や映写機で撮影して、“ 将来は絶対映画監督になる！ ”と決めていました。85 歳の今まで一度もその望みを変えずに来ました。

♪ 大学時代にバンドで、福生にある米軍の横田基地等を訪れたことはありますか？

私が演奏しに行くことはありませんでしたが、基地で演奏していたバンドマンたちに付いて行くことはありましたね。基地に行くと飲めるんですよ（笑）。横田基地以外にも立川などにも基地がありましたね。あと、横浜のホテルニューグランドの地下にあった米軍の人たちが行くバーにもよく行きましたね。とても楽しい思い出でした。昔は日本のジャズマンの人たちも基地で演奏して育っていきましたからね。

♪ 私設多目的ホールとして建てられた「アクトザール M.」では、音楽以外にもイベントが開催されているのですか？

そうなんです。私は音楽だけが芸術ではないと思いますので、やっぱり人間に必要なのは娯楽と言いますか、琴線に触れるようなものは音楽以外にもありますので、そういうことも可能な場所を作って、皆さんが楽しめるような自由な空間を作ろうと思ったんです。生涯をかけて監督した作品が、劇場用映画を含めて 450 本くらいあるんです。この膨大な作品を一本一本、全部テープから DVD を 4K に変換して、それを自由に見れるように場所と環境を作りましてね。グランドピアノも置きまして、ホールにしました。40 から 50 の座席と狭いですけども、狭いなりに利点もありますのでね。

可能な限り、声楽、雅楽、朗読、舞踊、ジャズ、あらゆるジャンルの人々が集まることができて、芸術的な表現をみんなが楽しめるようにね。誰からも援助を受けないで、私がプロデュースもしてあげるから、練習など自由に使っても一日 3000 円くらいで、ランニングコストも私が持つからどうぞ使って下さいという形で運営しています。監督を出来たお陰ですから、自分で稼いだものはあちらの世界に持っていけませんのでね（笑）。そういう形でこちらに置いて行くのが夢なんです。恩返しの意味でもありますね。東日本大震災のきっかけにいろいろと考えまして、東京から山形に拠点を移して、この「アクトザール M.」を作ったんです。いろいろと楽しんでやっています。

♪ 今回のこの巻頭スペシャル・インタビューは、ジャズ・ベーシストの荘司正敏さんを通じて連絡させて頂きご縁を頂きましたが、荘司さんとの出会いについて聞かせ下さい。

映画を作っている間、東日本大震災がありましてね。あの後、年末に飲み屋さんに行ったら、何

【中央が荘司正敏さん】

となく目が合って惹かれるような話をしていたんです。それが荘司さんで、荘司さんも山形の高等学校出身であることを知って、「村川さんですよね？」と荘司さんが声を掛けてくれたんです。荘司さんが東高で、私は南高ということで、偶然にお会いしたのですが、それ以来話が弾みましてね。早速、荘司さんのトリオで山形に来て頂いて、「アクトザール M.」でジャズを演奏してもらったんです。「アクトザール M.」のスタッフとも親しくなりまして、それ以来時折演奏しに来てもらうことになりました。

コロナの影響でここ 1~2 年来れないのが残念で仕方なかったですが、こんな形で加瀬さんともお話できる機会を繋いでくれまして、感謝しています。「アクトザール M.」では、ただ演奏して帰るのではなくて、終わった後には必ず会食をして、お互いにその人となりを知り、田舎の人たちの待っている気持ちも演奏家の人たちが知ってくれる方が良いわけです。大袈裟なことではなくて、生涯の交流というか、生涯忘れられないような思い出を作ってもらいたいんです。そのような気持ちで接するとまた面白いもので、世界の平和というものはそういうところから生まれる気がしていたので、それを今後もずっと続けて行きます。

♪ 憧れたジャズ・アーティスト、好きなジャズ・アルバム、その他、お気に入りのアルバムについて聞かせて下さい。

その時々で、彗星の如く現れたスターのような人たちがいましたので、個別に名前を挙げるというよりは、ほとんどのアーティストは聴いて来ましたね。今も毎日夜寝る前に2時間位は、ジャズだけでなく、クラシックはもちろんですけど、シャンソンなどを聴いています。音楽がないと眠れませんね。アルバムは特にこれというのは難しいですけど、ジャズではマイルス・デイヴィスの「死刑台のエレベーター」のレコードで、マイルス・デイヴィスが現場で映画を観ながら演奏した音源を収録したレコード等もあります。

♪ ビートルズについて語られることはあまりなかったかもしれませんが、ビートルズはよく聴かれましたか？

もちろん聴きましたし、アルバムも何枚も持っています。ビートルズを聴く時もレコードで聴いています。1966年の日本武道館公演は、ちょうど日活で仕事をしていましたから、忙しくて見に行けませんでしたね。

♪ ジャンルや洋楽邦楽を問わず、大好きなアルバムを挙げてもらえますか？

クラシックでは高校時代にチャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」を聴いた時にとても感銘を受けて、レナード・バーンスタインの録音なんですけど、これは今でも1週間に1度は必ず聴いていますね。この曲を聴くと死にたくなるから、逆に“生きてやろう！”と思うんです（笑）。あと、たまに父親を思い出して、宮城道雄という琴の神様のような人がいるんですけど、宮城道雄の「春の海」というレコードもよく聴いています。父親の形見のようなものですね。CDではなくて、すべてレコードで聴いています。

♪ 松田優作さんとの出会いとなったテレビドラマ「大都会 闘いの日々」以降、映画「最も危険な遊戯」「殺人遊戯」「蘇える金狼」「処刑遊戯」「薔薇の標的」「野獣死すべし」、テレビドラマ「探偵物語」など、松田優作さんとたくさんお仕事をされましたが、最初に松田優作さんに会った時の印象について聞かせて下さい。また、特に思い出深い作品はどの作品ですか？

最初の印象は私にとって不思議な感覚があって、こういう比喩がいいと思うんですけど、“暗闇の中に浮かぶ光の道標”という感じでしたね。それによって、私は道標＝道しるべを見たような気がするんです。それからずっと一緒にたくさんの作品を作って、「野獣死すべし」で一旦別々の道に分

かれて行くんですけどね。特に思い出深い作品は、最初に2人で思い切りやった「蘇える金狼」と最後に2人がお互いに分かりながら、別れる気配を感じながら作った「野獣死すべし」ですね。

男女でも音楽でもそうだと思いますけど、気配って感じません？　お互いに言葉で言うのではなくて、何も言わないで気配で分かるんですよね。「野獣死すべし」は、最後に2人で黙って、相手の言うことは全部OK、優作も私の言うことは全部OKっていう形で残していった作品でしたね。この2つが私の中で一番忘れられない作品です。それははっきり言えますね。

♪「探偵物語」ではSHOGUNのサウンドもとても印象深かったですが、SHOGUNを起用した経緯やSHOGUNとのエピソードなどありますか？

自然発生的に彼らの音楽を聴いて、現場に持って行こうということになったんです。“これだ！”と思わせる彼らの音楽の力、時代にも、「探偵物語」という作品にも合っていましたね。私も聴いていて楽しい、心地良い、忘れられない、いろんな言葉が合うような音楽で、思い出すだけで顔がほころんで来ますね。「探偵物語」での私と優作の八方破りなやり方の中で、あの音楽でまとまるような感じでした。SHOGUNの音楽が大好きだったので、打ち上げというとSHOGUNのメンバーとプロデューサーやスタッフと一緒に横浜で飲んだ思い出がありますね。すごく楽しかったですね。

♪ 松田優作さんは音楽家としても活動されていましたが、音楽について語ることなどはありましたか？

優作とは音楽でどうのこうのという話はしません

でしたが、優作の家に遊びに行くと、ラップ系の音楽を聴いていたことがありました。音楽の中の芝居というか、優作そのもののような気がして、こういう音楽に興味があるんだなと私なりに思ってはいましたけど。優作は音楽に直ぐに乗れるんですよね。私には芝居をしているように感じましたね。

♪ 村川さんと特に縁が深い石原裕次郎さん、松田優作さん、柴田恭兵さんは現在も活躍されていますが、3 人の方々の素顔について聞かせて下さい。

ストレートに石原裕次郎さんという人は、すっぴんで虚飾もなく、天からそのままストンって降りて来た感じでしたね。優作は先ほど“ 暗闇の中に浮かぶ光の道標 ”とお話したように、暗闇の中でも光る人という感じで、最初から最後まで私にとってはその感じがありましたね。恭兵くんはね、何だろうな、あの柔らかさや人間性も含めて、世の人が皆“ この人いいな～ ”と思える人でした。

最初に彼が所属していた劇団、東京キッドブラザースの公演を観に行って、それからまた 3~4 回観に行って惹かれて惹かれて、それで彼の劇団の団長に会いに行って“ 恭兵を貸してくれ！ ”と頼んだんです。こんな素晴らしい人は舞台の公演だけではなくて、テレビという巨大な世界で活動した方がいいと直談判に行って、許可をもらったんです。恭兵くんを私の作品に出したのですが、劇団員の人たちも素晴らしかったので、劇団員もたくさん私の作品に出てもらったんです。

♪「蘇える金狼」にも出演され、個人的に「探偵物語」での服部刑事役も大好きだった成田三樹夫さんは、村川さんと同じ山形県出身でしたが、成田三樹夫さんはどのような方だったのですか？

やっぱり見られる方は見ているんですね～。この方は尊敬すべき素晴らしいキャラクターの人です。「鯨の目」という遺稿句集を出されているんですけど、これはぜひ読まれるといいですよ。本当に尊敬すべき素晴らしい人という言い方が当てはまる人ですね。この方も自分で出ると決めたら、その役、相手方、監督の言い方ややり方に沿ってちゃんと演じたいと思った人ではないでしょうかね。俳優としても人間としても、私はどれほど助けられたか分かりません。亡くなっても偲ばれる人ですね。山形の片隅ですけど、私の家にも来て一緒に飲んだこともあるし、遊びに来たこともあります。優作もそうですけども、皆私の家に遊びに来て一緒に時間を過ごしましたね。

♪「探偵物語」の他に、「大都会」「西部警察」「あぶない刑事」等々、数多くの人気シリーズも手掛けられましたが、村川さんが個人的に思い入れのある作品はありますか？

「探偵物語」はやりたい放題のことをやりましたから、思い入れはありますよね。それと、「はみだし刑事情熱系」というシリーズもやったんですけど、この作品で樹木希林さんとご一緒したことがあったんです。この作品が終わった頃に、希林さんが“ 村川さん、今度車を変えることにしたの ”と言って来たんです。シトロエン 2CV という籠の鳥みたいなフランス製のブリキで作ったみたいな車があるんです（笑）。当時希林さんは長いことそれに乗っていたんですけど、“ 古くなって変えたいから、この車いらない？ ”と言ってね。私は車が大好きですから、それまでよく“ この車いいねー ”って言っていたんですね。それで譲ってもらったんです。

希林さんは“ もらってくれてありがとう ”と言って、また新たにシトロエンの車を買ったみたいですね。それで、その後に書いたそうなんですけど、自筆の色紙を贈ってくれたんです。それがとてもいい字で、「アクトザール M.」に飾ってあります。その当時、希林さんは片方の眼が悪くなり始めた頃だったんですよ。だから、その心境として自分を亀に例えて、「一眼の亀の浮木の孔に逢へるがごとく」と書いてあるんです。なかなか意味の深い言葉で、哲学的だけど見れば分かるんですよね。「天からの光に導かれるような楽しい時間をありがとう」と書いてあるんです。

希林さんは当時内田裕也さんともいろいろあって、家庭に戻れば現実が待っているわけですよね。でも、子供も授かって、しかも、仕事が楽しかったんだって。「はみだし刑事情熱系」に出ている間、

ものすごく楽しかったので、扁額にして贈ってくれたんです。私はそれをみんなに見てもらいたいので、「アクトザール M.」に飾ってあるんです。

♪ 村川さんがこれまで手がけた数多くの作品の中で、1番の転機となった作品はどの作品ですか？

「野獣死すべし」ですね。

♪ 現在の世の中についてどのように思いますか？

私見としてですけど、世の中狂気に満ちて、我を忘れて拙速に走っているのではないかと思いますね。暗黒の中から宇宙が誕生したように、生命が生まれて、人類が生まれたわけですけども、地球時間と言いますか、科学者たちが比喩的に“残された時間はもうない”ってよく発表されているじゃないですか。早いから良いとか、便利だから良いとか、原子爆弾も含めてですけど、人類の為になるとか、人類に利するものとか、地球時間に示した通り、残り少ない方に向かっているんじゃないかって思いますね。

業というか、インドでカルマってあるじゃないですか、宿痾（しゅくあ）と言うんですけども、人間は治ることのない病気に罹っているじゃないじゃないと思うんですよね。進歩は本当に進歩なのかどうか考えないといけないと思いますし、進歩＝退歩ではね･･･。便利だからとか、表現が新しいからとか言っていること自体、退歩ではないか、果たしてこれで良いのかと思いますね。これはあくまでも私見ですけどね。

♪ もし松田優作さんが生きていたら現在 73 歳ですが、村川さんが新たに松田優作さん主役で映画を撮るとしたら、どのような作品にしたいですか？

従容として、運命に従って死に向かうのではなく、死を賭すのではなく、絶対に死なないという信念に賭けて、その信念に向かって進むという人生を主題にした映画を作ってあげたいなと思いますね。優作が亡くなってから 33 年、生きていれば 73 歳なんて思うと涙が出て来ますね･･･。俺ももう 85 歳だぞと言いたいですけど、こういう形で優作のことを思い出してくれて、このように優作のことを取り上げてくれることは私もとても嬉しいです。

♪ 2016 年に書籍「映画監督 村川透 和製ハードボイルドを作った男」が出版されましたが、ご自身で肩書きを付けるとしたら、どのように付けますか？

私自身はとても単純なんです。4 歳の時にベットの敷布をスクリーン代わりにして、小さいな映写機

で映像を観て感動して、生涯の仕事として映画監督を選んだ。今までその気持ちが変わらずにずっとやって来た自分として、これは今だからこそ言えると思うんですけども、肩書きということではなく、石に刻み込んでいる言葉があるんです。それは、「小さな志」「固い決意」「実行と継続」。

「小さな志」は子供の頃からの決意を曲げなかった自分。それを確実に実行して今も継続しているっていう、それぞれの言葉なんですけど、それを私は心ある人には言っている言葉なんです。「和製ハードボイルドを作った男」という肩書きは、自分では恥ずかしいんですけど、出版社は本を売らなければいけないことはよく分かるので、それはそれで良いと思います（笑）。私はいつまで生きるか分かりませんけれども、死ぬ前にもう石に刻み込んでいる言葉で庭に埋めて行くつもりですけども、これが私の最後の言葉みたいなものですね。

♪ 今後の活動や実現したいことなどありますか？

冒頭でお話した現在の活動、映画製作と「アクトザール M.」の運営を続けて行きますが、自分の最期を見てみたいんですよ。自分の最期なんて見ることが出来ないから、こういうことを言うんですけどね（笑）。見れないことを見てみたいという私の気持ちを何となく理解してあげて下さい。

♪ 最後に「The Walker's」読者とファンに向けてメッセージをお願いします。

このインタビュー、この雑誌を読んでくれた皆さんに心より御礼を申し上げます。けして小生のようにならないように、それぞれの人生に限りある人生を賭けて生きて下さいますように。

村川 透監督が手がけた主な作品

《劇場映画》
白い指の戯れ（1972 年）
官能地帯 哀しみの女街（1972 年）
哀愁のサーキット（1972 年）
最も危険な遊戯（1978 年）
殺人遊戯（1978 年）
白昼の死角（1979 年）
蘇える金狼（1979 年）
処刑遊戯（1979 年）
薔薇の標的（1980 年）
野獣死すべし（1980 年）
獣たちの熱い眠り（1981 年）
凶弾（1982 年）
シングル・ガール（1983 年）
聖女伝説（1985 年）
侠女十三妹（1986 年）
行き止まりの挽歌 ブレイクアウト（1988 年）
もっともあぶない刑事（1989 年）
押忍 !! 空手部（1990 年）
BEST GUY（1990 年）
よるべなき男の仕事・殺し（1991 年）
あぶない刑事リターンズ（1996 年）
まむしの兄弟（1997 年）
さらば あぶない刑事（2016 年）

《ビデオ映画》
野獣都市 天使の囁き（1991 年）
復讐の掟 ROGUE COP（1992 年）
復讐は俺がやる DISTANT JUSTICE（1992 年）
ニューヨーク・アンダーカバー・コップ（1993 年）

《テレビドラマ》
【連続】
大都会シリーズ
大都会 闘いの日々（1976 年）
大都会 PARTII（1977 年～ 1978 年）
大都会 PARTIII（1978 年～ 1979 年）
大追跡（1978 年）
探偵物語（1979 年～ 1980 年）
西部警察シリーズ（1979 年～ 1984 年）
大激闘マッドポリス '80（1980 年）
キャンパス・アクション 探偵同盟（1981 年）
プロハンター（1981 年）
ただいま絶好調！（1985 年）
迷宮課刑事おみやさん（1985 年）
あぶない刑事（1986 年～ 1987 年）
六本木ダンディーおみやさん（1987 年）
あきれた刑事（1987 年～ 1988 年）
ベイシティ刑事（1987 年～ 1988 年）
はぐれ刑事純情派シリーズ（1988 年～ 1995 年）
さすらい刑事旅情編シリーズ（1988 年～ 1994 年）
ゴリラ・警視庁捜査第 8 班（1989 年～ 1990 年）
代表取締役刑事（1991 年）
はだかの刑事（1993 年）
名奉行遠山の金さんシリーズ（1994 年～ 1996 年）
風の刑事・東京発！（1995 年）
将軍の隠密！影十八（1996 年）
刑事追う！（1996 年）
さむらい探偵事件簿（1996 年～ 1997 年）
はみだし刑事情熱系シリーズ（1996 年～ 2004 年）
暴れん坊将軍シリーズ（1997 年～ 2001 年）
おみやさんシリーズ（2002 年～ 2009 年）

【単発】
《火曜サスペンス劇場》
ハムレットは行方不明（1981 年）
死を抱く女（1982 年）
女子高校生への鎮魂歌（1983 年）
二人の女（1983 年）
見知らぬ夫（1986 年）
戸籍のない夫婦（1986 年）
名無しの探偵 3 愛の復讐（1987 年）
安比高原 十和田湖連続殺人事件（1987 年）
女監察医室生亜季子 17「薬殺」（1994 年）
おかしな夫婦シリーズ（1995 年～ 1997 年）
街の医者・神山治郎（2001 年）

《月曜ドラマスペシャル》
京都貴船連続殺人（1996 年）

《金曜エンタテインメント》
釣りデカ事件簿 海の密室殺人事件（1997 年）

《土曜ワイド劇場》
天使と悪魔の美女（1983 年）
呪いのマネキン人形（1984 年）
炎の中の美女（1984 年）
結婚って何さ殺人事件（1986 年）
左きき女の華麗な殺意（1986 年）
カルチャースクール連続殺人事件（1987 年）
東京原宿ハウスマヌカン連続殺人（1987 年）
密室の死重奏（1987 年）
日時計館の美女（1988 年）
信じますか？世にも不思議な物語（1988 年）
神戸六甲 まぼろしの美女（1989 年）
同時殺人トリック！軽井沢～東京スターダスト殺人事件（1991 年）
探偵事務所 1 依頼人が消えて い…（1994 年）
西村京太郎トラベルミステリーシリーズ（2001 年）
鉄道捜査官シリーズ（2002 年 A）
鉄道捜査官 (18)「東京～日光・鬼怒川をめぐる鉄道写真の謎」（2018 年）
さくら署の女たち（2006 年）
新・棟居刑事シリーズ（2008 年）
越境捜査シリーズ（2008 年～ 2011 年）

《火曜スーパーワイド》
伊豆展望列車（1989 年）

《火曜ミステリー劇場》
十津川警部の対決（1991 年）
華麗なる追跡 THE CHASER（1989 年）
伊勢湾・鳥羽…海からの招待状（1991 年）
試すなかれ（1992 年）
素浪人 花山大吉（1995 年）
西部警察スペシャル 爆破炎上 5 秒前…凶悪テロに挑む決死の戦い！（2004 年）
SP 警視庁警護課シリーズ（2011 年～ 2012 年）

《テレビドキュメンタリー》
木曜スペシャル ADMIRAL'S CUP - 1977 - 裕次郎は燃えた！（1977 年）